

§ 1

通達・報告・訓令
告示・建議・要項

} 等

1 調査報告

羅馬字書方調査報告 (明治33.11.5 官報による。原文は縦書。)

文部省ニ於テ曩ニ文学博士上田万年，神田乃武，渡部董之介，小西信八，磯田良，文学博士高楠順次郎，湯川寛吉，蘆野敬三郎，金子銓太郎，大西祝及藤岡勝ニヲシテ羅馬字ヲ以テ国語ヲ写ス方法ヲ調査セシメシニ其報告書左ノ如シ (文部省)

文字ノ呼ヒ方及順序

ア	ベ	チェ	デー	エ	エフ	ゲー	ハー	イー	ジェ	ケー
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
エル	エム	エン	オー	ペ	クー	ルー	エス	テー	ウ	ヴィ
L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
ワー	エクス	ヤー	ゼット							
W	X	Y	Z							

使用ノ文字

ABC 二十六字ノ中 LQVX ヲ除キ他ノ二十二字ヲ用キルコト、ス

各音ノ記シ方

第一 直音 (仮字羅馬字対照表)

ア	イ	ウ	エ	オ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
a	i	u	e	o	za	ji	zu	ze	zo	ha	hi	fu	he	ho	ya	i	yu	ye	yo
カ	キ	ク	ケ	コ	タ	チ	ツ	テ	ト	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ラ	リ	ル	レ	ロ
ka	ki	ku	ke	ko	ta	ci	tsu	te	to	ba	bi	bu	be	bo	ra	ri	ru	re	ro
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ワ	ヰ	ウ	エ	ヲ
ga	gi	gu	ge	go	da	ji	zu	de	do	pa	pi	pu	pe	po	wa	i	u	e	o
																			(wo)
サ	シ	ス	セ	ソ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	マ	ミ	ム	メ	モ					
sa	si	su	se	so	na	ni	nu	ne	no	ma	mi	mu	me	mo					

注意 凡テ仮字ニ拘ラス現今ノ音ニ從テ記スコト、ス

シハ shi ヲ取ラス si トス
 ジヂ, ズヅ ハ現今同一ニ発音セル
 カ故ニ同様ニ記スコト、ス
 チハ chi ヲ取ラス ci トス
 フハ hu ナル能ハサルカ故ニ fu トス
 イ 𐤎 ハ凡テ i ヲ以テ之ヲ記ス
 エ 𐤎 ハ e トスレトモ ye ハ残スヘ

キ必要アルヲ以テ之ヲ存ス
 ウハニツナカラ u トス
 オ 𐤎 ハ通シテ o トナスてにをはノ
 ヲモ亦 o ヲ以テ記スコト、ス但シ語
 音ノ上ニハ wo トスヘキトコロアル
 ヲ認ムルヲ以テ之ヲ存ス
 鼻音ノ ga ハ別ニ綴リ方ヲ立テス ga
 ヲ両様ニ読マシムルコト、ス

第二 拗音 (仮字羅馬字対照表)

キヤ	キュ	キョ	ギヤ	ギュ	ギョ	ニヤ	ニユ	ニョ	ヒヤ	ヒュ	ヒョ
kya	kyu	kyo	gya	gyu	gyo	nya	nyu	nyo	hya	hyu	hyo
シヤ	シュ	ショ	ジャ	ジュ	ジョ	ビヤ	ビュ	ビョ	ピヤ	ピュ	ピョ
sya	syu	syo	ja	ju	jo	bya	byu	byo	pya	pyu	pyo
チャ	チュ	チョ	ヂヤ	ヂュ	ヂョ	ミヤ	ミユ	ミョ	リヤ	リュ	リョ
ca	cu	co	ja	ju	jo	mya	myu	myo	rya	ryu	ryo

注意 kwa kwo gwa gwo ノ音ハ標準トスヘキ語音中ニハ存在セシメス
 シテ可ナリト認ムルヲ以テ之ヲ存セス
 ジャ ヂャ 等ハ直音ノ例ニ準シテ區別セス

第三 長母音

長母音ノシルシヲ字ノ上ニ置キテ之ヲ示ス

例

byōki 病氣 hōritsu 法律

第四 促音

促音ハ子音ヲ相竝ヘテ之ヲ示ス

例

gakkō 学校 teppō 鉄砲

第五 鼻声音

鼻声音ハ常ニ n ニテ終ルモノトス

例

Shinbasi 新橋 nenpō 年俸

第六 音ノ結合スル場合

い 母音ノ同和

母音相連リテ同和スル場合ニハ其発声ニ從テ之ヲ記ス

例

i+a	tsuki-ai	ヲ	tsukiyai	トス
i+e	Mi-eken	ヲ	Miyeken	トス
i+u	Kiri-u	ヲ	Kiryū	トス

此場合ニハ拗音ニ転ス

i+o	ni-oi	ヲ	niyoi (コレハ訛音ヲ以テ云フ)	トス
u+o	gu-ai	ヲ	guwai	トス
e+a	ume-awase	ヲ	umeyawase	トス
e+i	Te-ikoku	ヲ	Tēkoku	トス

尙コレハ實際ニツキテ調査シタル上コノ書方ニ従フヘキ語ヲ定ムルヲ良シト決定ス

ろ 子音相連結スルコト

實際ニ子音相連リテ其間ニ母音ノ存在セサルコトヲ認メ得ル語ハ子音ノ字ヲ連ヌルコト、ス

例

ks	wataksi	私	kr	krikri	円顚
gr	dongri	団栗	br	sukobru	頗
sk	taski	襪	kt	doktoru	どくとり

コレモ調査ノ上表ヲ製シテ決定スルモノトス

は 子音ト母音ト連ナリテ相結フヘカラサル場合

コノ場合ニハ「ハイフン」ヲ用キルヘシ

例

gen-an	原 案	gen-in	原 因
--------	-----	--------	-----

頭字ノ用法

左ノ場合ハ頭字ヲ用キルモノトス

- 一 固有名詞ノ頭
- 三 文章ノ頭

符号ノ命名

,	コンマ	!	感動ノシルシ	-	ハイフン
;	セミコロン	()	括弧	-	長母音ノシルシ
:	コロン	[]	鉤括弧	'	アポストロフ

。	止り	“ ”	引用ノシルシ
?	問ヒノシルシ	—	線

符 号 ノ 用 法

- 一 「コンマ」ハ最小ナル切目ヲ示ス為ニ用キル
- 一 「セミコロン」ハ「コンマ」ヲ以テ示シタル区分ヨリ大ナル区分ヲ示スニ用キル
- 一 「コロソ」ハ「セミコロソ」ヲ以テ示シタル区分ヨリ更ニ意味ノ完結シタル区分ヲ示スニ用キル
- 一 「止り」ハ一文ノ完結セルコトヲ示スニ用キル
- 一 「問ヒノシルシ」ハ問ヲ示ス文ノ終ニ置ク
- 一 「感動ノシルシ」ハ感動ヲ顯ハス語又ハ文句ノ終リニ置ク
- 一 「括弧」ハ説明ノ為ニ文中ニ挿入セラレタル語句若クハ文ヲ囲ムモノトス (但シ二箇ノ線ヲ以テ代用スルモ可ナリ)
- 一 「鉤括弧」ハ原文ニナキ語ヲ挿入スル時ニ用キル
- 一 「引用ノシルシ」ハ他書ヨリ引用シ来レル文句若クハ他人ノ談話ヲ直写セルトキニ其前後ニ之ヲ置ク
- 一 「線」ハ文句ノ組立急ニ変シタルトキ等ニ用キル又例ヲ挙ケントスル前ニ「コロソ」ト共ニ之ヲ置ク
- 一 「ハイフソ」ハ「各音ノ記シ方」第六ハノ場合或ハ二語若クハ二語以上ヲ続ケ書クトキ其成立ヲ示スニ必用ナル場合ニ之ヲ用キル又二行ニ跨リタルトキ其一ナルコトヲ示スニ用キル
- 一 「アポストロフ」ハ文字ノ略セラレタルコトヲ示スニ用キル

語 ノ 分 別 書 方

名 詞

- 一 名詞代名詞ノ複數ヲ示スニ用キル ナ下 下モ ラ タチ ノ如キてにをはハ名詞ト連ネ書セズ

例

wataksi domo 私ども anata gata あなたがた

- 二 名詞ニツク敬辞おハ連書ス

例

Omatsu お 松 Otake お 竹

- 三 名詞ニツク様, 殿, 君等ハ連書セス

例

Saigō sama	西郷様	Ōyama kun	大山君
Taii dono	大尉殿		

四 名詞ニツクてにをはハ名詞ト相分ツヘシ

例

ningen to iu mono wa 人間といふ者は
但シ例外トシテ連書スヘキ必要アルモノハ調査ノ上表ヲ作りテ定ム
ルヲ良シト決定ス

五 動詞或ハ形容詞ニコトヲツケテ名詞トスルコトアリコノコトハ連書セス

例

hon o yomu koto	本を読むこと
nagekawasii koto	歎はしいこと

六 複合名詞ハ調査ノ上語彙ヲ造ルコト、ス

形容詞

- 一 形容詞ノ語尾ニ i ノ二箇連ナルコトアリコノ場合ニハ i ノ長母音トセス
シテ i ヲ二箇連ヌヘシ

例

utsukusii hana 美しい花

- 二 名詞ニ ナ ナル タル ノツキテ形容詞トナルモノアリ此中ナノミハ続ケ
テ書キ他ハ離スヘシ

例

aimaina hanasi	曖昧な話
seimitsu naru torisirabe	精密なる取調
kore ni hōfutsu taru mono	是れに彷彿たるもの

代名詞

- 一 代名詞トてにをはトハ左ノ場合ノ外ハ分ツコトトス
kono, sono, dono, ano, kano ノ如ク代名詞トてにをはニテ已ニ
一箇ノ語トナレルモノ
- 二 代名詞トてにをはトニテ副詞ヲ成ス場合ハ連書スルモノトス

例

soretomo	それとも	arehodo	あれほど
----------	------	---------	------

副詞 (ママ)

- 一 名詞等他ノ詞品ニてにをはノツキテ副詞トナルモノ多シコレハ實際副詞

トナリ終レルモノ、外ハ続ケサルモノトス

例

aikawarazu	相交らず		sono mama	其儘
asikarazu	悪しからず			

但シコレハ調査ノ上別ニ表ヲ定ムルヲ良シト決定ス

二 副詞句ヲナスてにをはニ (ni) ハ離ス

例

iciban ni 一番に Tōkyō ni 東京に

接 続 詞

接続詞モ亦副詞ノ場合ト等シク已ニ一箇ノ接続詞トナレルモノハ一綴リニ書クモノトシ其他句ヲナセル場合ハ相分ツコト、ス

例

sikasinagara 併ながら somosomo 抑

動 詞

一 動詞ト助動詞トハ分チ書クコト、ス

例

oide asobasu sō de gozai masu 御出遊ばすさうで御座います

二 動詞ノ頭ニツクヘキ敬辞ヲハ続ケ書クコト、ス

例

oagari nasai mase 御あがりなさいませ

三 動詞ノ過去ヲ示スタリノ如キハ続ケ書クコト、ス

例

yukitari 行きたり

四 動詞ニツ、クテハ続クルコト、ス

例

kosiraete 拵へて

数 詞

一 数詞ト名詞トハ相分ツヘキヲ原則トス

但シ左ノ場合ニハ続クルコト、ス

一 促音ヲナス場合

二 熟語ヲナセル場合

例	iccō	一 町		futatabi	再
---	------	-----	--	----------	---

二 数詞ヲ数字ヲ以テ示スコトハ場合ニヨリテ之ヲ許スコノ場合ニハ其次ニ

来ルヘキ名詞ハ音ノママヲ記スベシ

例

3000 byō 三千俵

但シ略符ヲ用キルトキハ此限ニアラス 仮令ハ俵ノ略符ニ h
ヲ書クカ如シ

三 数詞トてにをはトハ相分ツコト、ス

例

hitotsu no ie 一つの家

てにをは

一 をハ○ヲ以テ示スコト、ス

二 ヘハ e トス

三 漢語トてにをはトハ上ニ挙ケタル特別ナル場合ヲ除ク外ハ凡テ離シ記ス
ヘキコト、ス

感 動 詞

一 感動詞タルモノニハ感動符ヲ付スヘシ

二 アクセントハ付セサルコト、ス

2 訓 令

内閣訓令第3号

(原文は縦書)

各 官 庁

国語ノローマ字綴方ハ従来区々ニシテ、其ノ統一ヲ欠キ使用上不便
尠カラス、之ヲ統一スルコトハ教育上、學術上将又国際關係其ノ他
ヨリ見テ、極メテ必要ナルコトト信ズ。仍テ自今左ノ通ローマ字綴
方ヲ統一セントス。各官庁ニ於テハ漸次之ガ実行ヲ期スベシ。

昭和12年9月21日

1 国語ノローマ字綴方ハ左表ニ依ル

ローマ字綴表

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	i	yu	e	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	i	u	e	o			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	zi	zu	de	do	zya	zyu	zyo
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

2 前号ニ定ムルモノノ外ニ付テハ概ネ左ノ例ニ依ル

- 1 長音ノ符号ヲ附スル場合ハ okāsama, kūsyū, Ōsaka ノ如ク「ー」ヲ用フルコト
- 2 撥音ハ総ベテ「n」ヲ以テ表ハスコト
- 3 撥音「n」ト其ノ次ニ来ル母音(yヲ含ム)トヲ切離ス必要アルトキハ hin-i, kin-yōbi, Sin-Ōkubo ノ如ク「-」ヲ用フルコト
- 4 促音ハ gakkō, happyō, tossa, Sapporo ノ如ク子音ヲ重ネテ之ヲ表ハスコト
- 5 文書ノ書始及固有名詞ハ Wagakuni no…………, Sizuoka, Masasige ノ如ク語頭ヲ大文字トスルコト 尙固有名詞以外ノ名

詞ノ語頭ヲ大文字トスルモ差支ナシ

6 特殊音ノ表記ハ自由トス

(注： この訓令は、昭和29年12月9日内閣訓令第1号によって廃止された。62ページ参照。)

3 通 達

地図144号

(文部時報638号による。原文は縦書。)

昭和13年11月15日

文 部 省 図 書 局 長

各地方長官宛

中等学校ノ英語科教授ニ於ケルローマ字綴方ノ取扱ニ
関スル件

標記ノ件ニ関シ別紙甲号広島県知事進達ニ対シ乙号ノ通回答致置キ
タルニ付為念通牒ニ及フ

(甲号)

〔昭和13年10月26日広島県知事進達〕

中等学校ノ英語科教授ニ於ケルローマ字綴方ノ取扱ニ
関スル件

標記ノ件ニ関シ別紙ノ通提出有之候条此段及進達候也

(昭和13年10月広島西高等女学校長伺)

国語ノローマ字綴方ニ関シ一般的ニハ昭和12年9月21日内閣訓令
第3号ニヨリ方針ヲ示サレ又文部省トシテハ英語教科書検定ニ於テ

新式綴方教授ノ趣旨ヲ明カニサレタルモ尙旧来ノ式ヲ併記スル教科書多ク過渡期ニ於ケル實際教授ニ當ツテ如何ニ処理スヘキカニ迷ヒ居リ候就テハ如何取扱可申歟規準御示シ被下度此段御伺申上候也
(乙号)

(昭和13年11月15日地図144号文部省図書局長回答)
標記ノ件ニ関シ本年10月26日号外ヲ以テ貴管下広島西高等女学校長伺進達相成タル処右ハ左記ノ通ト御了知相成度

記

各学校ノ外国語科教授ノ際ニ於ケル国語ノローマ字綴方ノ取扱ニ関シテハ昭和12年9月21日内閣訓令第3号統一ノ国語ノローマ字綴方ニ依ルヘキモノトス
但シ当分ノ内ハ教科書及辞書等ノ關係ニテ従来ノ綴方ヲ併セ課スルコトハ適当ト認ムルモ書写ノ場合ハ内閣訓令ノ綴方ニ依ラシムルコト

(補注： 内閣訓令第3号は、9ページ参照。)

4 意 見

ローマ字教育を行ふについての意見 (原文は縦書)

(ローマ字教育協議会)
(昭和21年10月22日)

国語教育の徹底をはかり、社会生活の能率を高め、国民の文化水準を向上させるために、ローマ字によつて読み書きを行ふ習慣を国民一般に普及する必要がある。ローマ字教育協議会においてその方

策を協議した結果、次のやうな処置をとることを適切と認めた。

一 国民学校においてローマ字教育を実施すること。

国民学校においてローマ字教育を実施するについては、次の方法によることとする。

- 1 ローマ字教育に関する基準としては、別冊「ローマ字教育の指針」によること。
- 2 昭和22年度は、第4学年（又は第3学年）以上の各学年同時に開始すること。
- 3 授業時数は、1年40時間以上とすること。
- 4 昭和22年度の教科書は、児童用書および教師用書を文部省において編纂すること。
- 5 教師の訓練については、(イ)昭和21年度に卒業すべき師範学校の生徒に対し、ローマ字教授法の訓練を行ふこと。(ロ)教師の再教育の課程にローマ字教授法を入れ、又教師一般に対するローマ字教育講習会を開催すること。(ハ)師範教育においてローマ字教育をその課程に入れること。

二 青年学校、中等学校、高等専門学校の教育についても、その内容を豊富にするために、国民学校との関聯において、ローマ字教育課程の実現、ローマ字による国語その他の教科書の使用等を考慮せらるべきこと。

三 ローマ字教育を促進するために、学術的および社会的処置を講ぜられたきこと。

- 1 ローマ字教育に関する諸般の調査・研究を行ふこと。
- 2 関係諸団体間の連絡協調をはかること。
- 3 優良図書の刊行を促進し、普及をはかること。

右の目的のために、ローマ字教育委員会(仮称)を設けること。

四 ローマ字の表記法（特に綴り方）については、別冊「ローマ字教育の指針」に示す方式をとるが、さらに適當の機関を設け、学術上、教育上および實際生活上から研究を進め改善をはかられた

きこと。

以上の各項がすみやかに実現されるやうに希望する。

(補注：ここにいう「別冊『ローマ字教育の指針』」とは、「ローマ字教育の指針」と「ローマ字文の書き方」とを合わせたものである。)

5 当局談

文 部 当 局 談

(昭和22.1.20) (原文は縦書)

このたび、文部省では、国民学校においてローマ字教育を実施するために、その要項を決定しました。

今日の社会生活において、ローマ字の読み書きに慣れることは、国民一般にとって必要なことと考えます。そうして、このためには、まず、なるべく速やかに国民学校の児童がローマ字によって国語の読み書きができるように取り計らうことが肝要であります。

こういう趣旨から、来年度から国民学校においてローマ字教育を実施することとし、この要項を決定した次第であります。

国民学校においてローマ字を授けるについては、教育上からも学術上からも考慮を要する問題が多々あることと思います。しかし、なによりも大切なことは、国民の大部分がローマ字の読み書きに慣れることであり、ローマ字教育を実際に行いつつ、その結果を研究し、改善を計って行くことであります。

従って、この要項は、さしあたり昭和22年度に実施すべき点について定めたものであり、その実施の成果を基礎として、さらに昭

和 23 年度からの計画を考えて行きたいと思います。

ローマ字教育を実施することは、国語をやさしくし、合理化し、ひいては国民の国語生活を能率化する上の一助となると思います。

さきに「当用漢字表」・「現代かなづかい」が制定され、国民各方面の支持のもとに実行にうつされていることは誠に喜ばしいことではありますが、ローマ字教育の実施にあたっても、また各方面の御協力を得たいと存じます。

なお、本省においては、昨年 6 月以来、学者・教育者・ローマ字研究家および報道関係者等の参集を願い、ローマ字教育協議会を設けて、この問題について審議を重ねていただいたのでありますが、その結果「ローマ字教育を行うについての意見」がとりまとめられました。

この要項は、右の協議会の意見を参考とし、その実施の方法について慎重に検討を加えた上、決定したものであります。

(補注 : 「要項」は 17 ページを参照。)

6 通 達

発教 7 号

(原文は縦書)

昭和 22 年 2 月 28 日

文 部 次 官

各地方長官あて

国民学校においてローマ字教育を行うについて

昭和 22 年度から別紙要項に基づいて、国民学校においてローマ

字教育を行うことになったから、貴管下の関係各学校に示達し、遺憾なく実施されるよう取り計わりたい。命によって、これを通達する。

(補注：「要項」は17ページを参照。)

7 通 達

発教7号

(原文は縦書)

昭和22年2月28日

文 部 次 官

各 師範学校長 } あて
高等師範学校長 }
女子高等師範学校長 }

国民学校においてローマ字教育を行うについて

昭和22年度から別紙要項に基づいて、国民学校においてローマ字教育を行うことになったから、遺憾なく実施されるように取り計わりたい。命によってこれを通達する。

(補注：「要項」は17ページを参照。)

8 要 項

国民学校におけるローマ字教育実施要項

(昭和22. 2. 28)

昭和22年度から、国民学校において、事情のゆるすかぎり、児童にローマ字による国語の読み方、書き方を授けることとする。

昭和22年度に各国民学校において、ローマ字教育を行うには、次の各項による。

- 1 各国民学校において、ローマ字教育を行うかどうかは、その学校の教育上の責任者が、その学校の事情を考慮してこれを決定する。ローマ字教育を行う場合には原則として第4学年以上の各学年に行う。ただし、さらに下学年からローマ字教育を行い得るような学校では第3学年から行うことができる。
- 2 授業時数は1年を通じて40時間以上とし、国語あるいは自由研究の時間のうちで行う。
- 3 教授の方針、方法、その他については文部省で「ローマ字教育の指針」を編修し、配布することとする。
- 4 教科書は文部省編修のものをを使用することを原則とする。
- 5 国民学校において授けるローマ字文の書き方は別冊「ローマ字文の書き方」による。
- 6 ローマ字教育に関する教師の訓練については、本年度から適当の処置を講ずることとする。

(備考) (1) この要項における国民学校とは、来年度から新学制が実施される場合には、小学校および新制中学校をさすものである。

(2) 昭和23年度からの実施案については、昭和22年度における実施の成果を基礎としさらに研究の上決定する。

9 照 会

発教7号

(原文は縦書)

昭和22年2月28日

文部省教科書局長

各 地方 官
師範学校校長 } あて
高等師範学校校長
女子高等師範学校校長

ローマ字教育を行う学校数等の調査について

ローマ字教育に使用する教科書を準備する都合があるので、2月28日発教7号によりローマ字教育を行う学校数等について、次の様式によって調査し、至急報告願いたい。

記

昭和22年度にローマ字教育を行う学校数等の表(表は省略。)

10 新聞発表

ローマ字調査委員会準備会の開催について

(教科書局国語課)
(昭和22.12.5.新聞発表)

本日、各界・各団体の権威者・代表者の方々にお集まりをいただき、「ローマ字調査委員会準備会」を開きました。この準備会は、ローマ字調査会の性格があくまでも中正なものであり、公正妥当な結論を得られるようにという目的で開きましたもので、調査委員会が、真に社会各方面の権威者をもうらした民主的な構成であるよう

にするために、お集まりの方々から委員選出の方法・範囲、また、委員会運営の方法などについての隔意のない御意見をうけたまわり、それに従って委員会を設置し、ローマ字問題に関するあらゆる問題についての結論を得たいと念願している次第であります。

(昭和 22 年 12 月 5 日)

11 決 議

ローマ字調査委員会準備会決議

(昭和 23.1.29)

本準備会は、ローマ字問題の重要性に鑑み、本問題に関する公正にして権威ある委員会を構成するための案を得ることに努めてきたが、ここに結論を得た。ついでには本準備会の意見を基礎としてローマ字調査委員会が速やかに設置され、中正妥当な結論が得られるように希望する。

12 照 会

発教 81 号

(原文は縦書)

昭和 23 年 5 月 25 日

文部省教科書局長

各都道府県知事あて

ローマ字教科書の入要部数等の調査について

昭和23年度に使用されるべきローマ字教科書は、訓令式のつづり方によるものと、ヘボン（標準）式のつづり方によるものの2種が発行されることになっているが、これの製造・供給の必要上、貴管下の各小学校ならびに各新制中学校において、そのいずれのつづり方による教科書を必要とするか、またそのいずれでもよいか等について調査のうえ、左記の様式によって至急御報告願いたい。

注1 この報告は、さきに各地軍政部からの通達「ローマ字教育を行う手続」のうちの「質問形式第1号」の回答と、まったく合致した数であることが必要であるから、報告にあたっては、右を参照されたい。

2 教科書は、小学校用として（第3学年）第4，5，6学年を通して1冊を、新制中学校用として、第1，2，3学年を通じて1冊を発行するものであるから、教科書入要部数等の数は、各学年を通じての合計数を記入されたい。

記

（補注：様式の表は省略する。）

13 通 達

昭和 23 年 5 月 25 日

文部省教科書局長

各 師 範 学 校 長
各 高 等 師 範 学 校 長
各 女 子 高 等 師 範 学 校 長
各 青 年 師 範 学 校 長
東京農業教育専門学校長 } あて

ローマ字教育に関する調査について

ローマ字教育の現況を知り，あわせて昭和 23 年度に使用されるべきローマ字教科書の製造・供給の必要上から，貴管下の小学校・新制中学校について，同封の質問用紙に記入のうえ，至急返送されたい。

注 1 この質問はさきに各地軍政部から，各都道府県あてに通達されたものと同じものである。

2 ローマ字教科書は，小学校用として（第 3 学年）第 4，5，6 学年を通じて 1 冊を，新制中学校用として，第 1，2，3 学年を通じて 1 冊を発行するものである。

3 本年度に使用されるべき教科書は訓令式のつづり方によるものと，ヘボン（標準）式のつづり方によるものの 2 種が発行され，各学校の選択に応じて，そのいずれかが供給される予定である。

質問用紙

(1) ローマ字は昭和 22 年の学年度に教えられたか。

否 _____

然り _____

(2) 昭和 22 年の学年度にローマ字が教えられたならば，どの式

を採用したか。

- (イ) 訓令式（または日本式） _____
- (ロ) ヘボン式 _____
- (ハ) (イ), (ロ)両式 _____
- (ニ) その他 _____

(3) ローマ字教授について次の点に回答されたい。

- (イ) 開始の年月日 _____
- (ロ) 昭和22年の学年度における学習生徒数 _____
- (ハ) 昭和22年の学年度の授業時間 _____

(4) 昭和23年の学年度にローマ字を教えるつもりがあるか。

有 _____

無 _____

(5) 教えるつもりならば、どの式で教えるか。

- (イ) 訓令式 _____
- (ロ) ヘボン式 _____
- (ハ) どちらでもよい _____

(6) 昭和23年の学年度のローマ字教授について、次の点に回答されたい。

- (イ) 学習児童・生徒予定数 _____
- (ロ) 組 数 _____
- (ハ) 教師数 _____

14 照 会

発教 87 号

(原文は縦書)

昭和23年5月27日

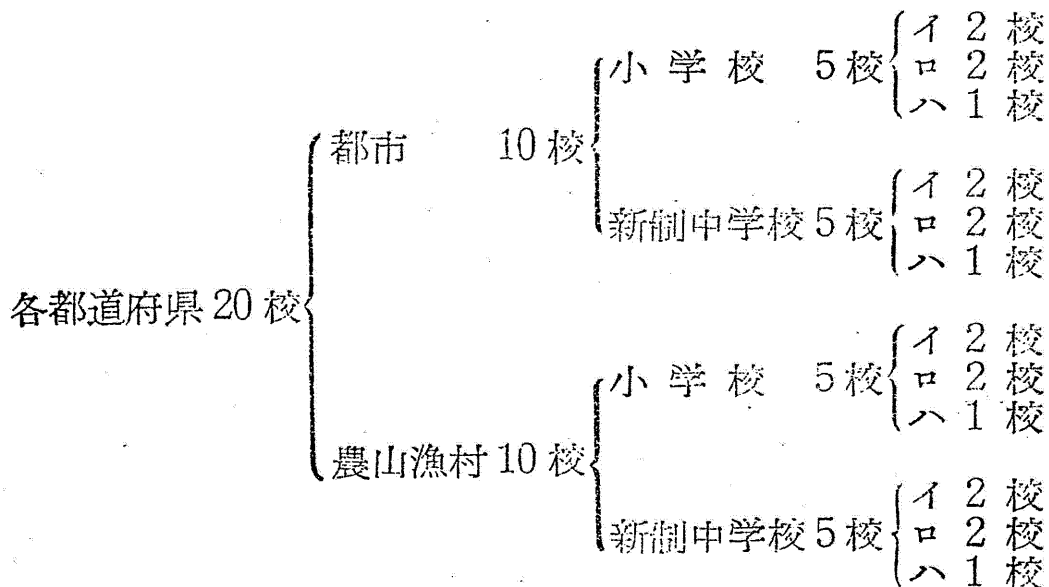
各都道府県知事あて

小学校ならびに新制中学校において、児童・生徒の
ローマ字の習得状況調査のために行う調査について

このたび文部省においては、小学校ならびに新制中学校における
ローマ字教育に関する参考資料として、左記の各項に基いて調査を
行うことになった。ついてはこれが準備のため、同封の回答用紙に
所要事項を記入のうえ、至急御返送願いたい。

記

一 小学校児童ならびに新制中学校生徒を対象として、次の区分に
よってローマ字の習得状況を調査するために、調査を行う。



各都道府県は右によって、それぞれ 20 校を調査校として選択し、
報告されたい。右の区分のうち、

- イ は昭和 23 年度以前からローマ字教育を実施している学校。
- ロ は昭和 23 年度以前にはローマ字教育を実施していなかった
学校。
- ハ は現在までローマ字教育を実施していない学校。

とする。なお、農・山・漁村の配分は、各都道府県において、各自の実情に応じて適宜選択されたい。

- 一 調査のための考査は3回行うこととし、その時期は次のとおりの予定である。

第1回調査 第1学期末（昭和23年7月）

第2回調査 第2学期末（昭和23年9月）

第3回調査 今年年末（昭和24年3月）

- 一 調査のための考査問題は、文部省で作成し、各都道府県あてに配布する予定である。各都道府県はそれを調査校に配布して考査を実施のうえ、その答案をまとめて、本省あてに返送せられたい。なお、考査問題ならびにその取扱等については、別に通達する。

（補注：「回答用紙」は省略する。）

15 建 議

昭和25年3月1日

文部大臣 高瀬荘太郎殿

ローマ字調査審議会会長

安 藤 正 次

建 議

現行「ローマ字教育の指針」の改訂に関して、かねてから、ロー

マ字調査審議会の教育部会において慎重に審議を進めておりましたところ、昭和24年12月20日の第1回総会で、別冊「改訂ローマ字教育の指針」を議決いたしました。つきましては、この普及に関して最善の努力を尽されるよう希望いたします。

(補注：「改訂ローマ字教育の指針」は、71ページを参照。)

16 照 会

昭和26年6月28日

.....教育委員会教育長あて

文部省調査普及局国語課長

ローマ字教育実験学級について（照会）

本年度から全国小学校のうち数校にローマ字教育実験学級を設けて、下記の概要によって実験調査を実施することに決定しました。

この調査は、現在小学校において「ローマ字教育の指針」により国語科の一環として行われているローマ字教育の実験調査を実施するもので、他教科をローマ字で教育し、その学習効果を調査するような特殊な実験調査を目的とするものではありません。

ついては、実験学級を決定するために、国立教育研究所の調査資料にもとづいて貴管下の.....小学校を一応その候補校として選定しましたが、当方としては当該教育委員会と充分協議の上で学校を決定したいと存じますので、次の3項目について、7月20日までに

御回答くださるようお願いいたします。

- (1) 上記の学校がこの実験調査に協力する意向があるか、否か。
- (2) 貴教育委員会において上記の学校に実験学級を設けることに同意されるか、否か。
- (3) 上記の学校に実験学級を設けてさしつかえない場合には、その学校で、標準式、訓令式、日本式のうちの式のローマ字つづりを採用されるか。

記

- 1 目的 ローマ字教育の学習効果を調査するため。
- 2 対象 小学校第3学年の (1) 現在までローマ字教育を課したことがなく、 (2) 本年度第2学期(9月)からローマ字教育を課し得る学級であること。

(特別の編成をしない自然学級で、1校に1学級とする。)

注 この実験調査は当該学級で来年度も継続する予定。

3 条件

- (1) 時間配当、教材、指導法、実験の課題、記録、報告等については、当方の「ローマ字教育実験調査打合会」で協議決定し、実験学級担任教官はそれによって学習の指導に当り、その経過を報告すること。
- (2) 授業時間数は、1学年を通じて40時間程度を標準とする。
- (3) 教材のうち、教科書については、本年度の第4学年用教科書のうち、実験学級担任教官の希望するものを使用すること。
- (4) 実験の課題はたとえば、
 - イ 国語教育としてのローマ字教育の立場から、
 - a 言語意識の向上
 - b 表現力の変化(ローマ字文の語い、文体に与える影響。)
 - c 方言、なまり音の標準語化
 - ロ ローマ字教育内の問題として、
 - a 分ち書き指導上のくふう点

- b くとう点の指導法
- c 読み書きのはやさ など。

17 照 会

昭和 26 年 6 月 28 日

.....学長 あて

文部省調査普及局国語課長

ローマ字教育実験学級について（照会）

（補注） この照会は国立大学付属の小学校へ設置すべき実験学級に関して当該大学の学長あてのもので、趣旨は教育委員会教育長あてのものと同じであるから、本文を省略する。

18 要 項

ローマ字教育実験調査実施要項 （昭和 26 年 8 月）

1 目 的

この実験調査は、義務教育期間中の普通の自然学級におけるローマ字学習の効果を調査して、ローマ字教育上の種々の問題点を発見

するとともに、調査の結果を分析・評価して、ローマ字教育に関する基礎的な資料を得ようとするものである。

2 組 織

- (1) この実験調査は、文部省調査（普及）局国語課，国立教育研究所，国立国語研究所が協力して行う。
- (2) ローマ字教育実験調査研究会を設けて，指導案，テスト問題などを作成し，および実験調査の結果の分析・評価，その他について研究協議する。
- (3) 実験調査に関する事務は，文部省調査（普及）局国語課において処理する。

3 対 象

次の条件によりうるもの。

- (1) 「小学校（国民学校）におけるローマ字教育実施要項」（昭和22年2月28日文部次官通達）によってローマ字教育を行う自然学級。
- (2) 今後少なくとも3か年は継続して行いうる学校。
- (3) 今年度は，現在までローマ字教育を実施していない小学校第3学年の学級であって，第2学期から実施しうる学級。
- (4) 自然学級はこの実験調査開始のときの条件であって，その後については，児童の転入学などに特別の考慮を加えるものとする。

4 実験学級の選定

- (1) 国立教育研究所の資料によって，学校の教育課程のグループを基礎に，学校の学級数，教職員ひとりあたりの児童数，および地理的条件等を考慮して選定した。
- (2) 今年度の設置学級は20学級とする。

5 授業時間数および配当（補注参照。）

- (1) 1学年を通じて40時間以上を標準とする。
- (2) 今年度は第2学期以降40時間とする。

(3) 今年度は40時間を区分して、前期15週間は1週2時間ずつ30時間、後期10週間は1週1時間ずつ10時間とする。

(4) 学習時間の配当と学習効果との関係について調査するため、以上の時間数の配当を下記の二つの種類に分けて行う。

甲類：前期15週間，30時間の授業を1週40分単位で3回行い，後期10週間，10時間の授業は1週60分を2回以下で行う。

乙類：前期15週間，30時間の授業を1週20分単位で毎日行い，後期10週間，10時間の授業を1週20分単位で3回に行う。

(5) 甲類，乙類の時間配当を実施する実験学級は下記のとおりである。

甲類：函館付小，秋田付小，光が丘，川崎，宇都宮付小，青木南，新鹿，若桜，法勲寺，隈府。

乙類：富谷，宮寺，常磐松，磐田北，浮孔，新宮，桑島，生石，東国分，深江。

6 教材

(1) 学習指導は教科書を教材として行う。

(2) 今年度は第4学年の教科書を使用する。

(3) 使用教科書は，実験学級を設ける学校が選定し，文部省があっせんする。

(4) 副読本・参考書等は原則的に学習指導の教材としては使用しない。

7 学習指導法

(1) 指導法については，実験調査の条件をできるかぎり同じくするために，文部省において具体的な指導案を作成し，それによることとする。

(2) 今年度は，学習指導要領国語科編（案）に基づいて学習指導試案を作成した。

(3) 宿題に類するものは，原則として課さないこととする。

(4) 課外指導は原則として行わないこととする。

8 実験調査項目

今年度は、特殊な調査項目は設定しない。

9 学習活動の観察記録

- (1) 担当教官は、学習指導に当っては学習指導要領国語科編(案)および指導試案に基づいて中心的な話題・題材を設定して毎時間の教案を作成する。
- (2) 学習活動について、学級別および個人別に綿密に観察し、学習指導観察記録簿・効果判定は話題(教材)ごとに学級別学習指導観察記録に毎時記入し、それに個人の学習活動、その効果などの著しいものを並記する。個人別の観察記録・評価は個人別学習指導観察記録簿にできるだけ詳しく、少なくとも1か月ごとに記入する。
- (3) 観察記録の原簿は、文部省の求めに応じ、随時提出する。
- (4) 観察記録・評価は所定の学級別、個人別の各様式により、1か月ごとに教育委員会を通じ、文部省に報告する。

10 テスト

- (1) 担当教官は、学習指導の段階ごとに、随時、テストを行って学習活動の評価をする。テストの結果・評価については、教育委員会を通じ、文部省に報告する。
- (2) だいたい、17時間、30時間の指導経過後には、文部省で指定する中間テストを行う。報告については第1項に同じ。
- (3) 指導の40時間終了後には、教育委員会の協力を得て、実験学級全体についてテストを行う。
- (4) 第2項、第3項以外のテストに要する時間は、40時間のうちに含める。

11 国語学力テストおよび環境調査

- (1) ローマ字文の学習指導の開始前、文部省で作成した問題により、漢字・かなまじり文による学力テストを行う。
- (2) また、所定の様式により、環境調査を行う。

12 担当教官との連絡指導

- (1) 必要に応じ、教育委員会を通じ、文部省と緊密な連絡を行う。
- (2) 全国3か所において、ローマ字教育実験調査研究会の委員の参加を得て、指導を兼ねてデモンストレーションを実施する予定。

13 実験調査の結果

担当教官提出の観察記録の整理，テストの結果の整理，テストの結果と学習活動との相関関係の分析等を行う。

(補注)

授業時間数および配当について、
昭和27年度は、

1年間30週間、45時間を第1年度の甲類・乙類の区別を継続して行い、

甲類：函館付小、秋田付小、光が丘、川崎、宇都宮付小、青木南、新鹿、若桜、法勲寺、隈府は、

1週90分を45分ずつ火、木（または水、金）の2回に分けて行い、

乙類：富谷、宮寺、常磐松、磐田北、浮孔、新宮、桑島、生石、東国分、深江は、

1週90分を30分ずつ、月、水、金（または、火、木、土）の3回に分けて行った。

昭和28年度は下記の要領によって、1年間40時間のわくだけを決め、指導回数・時間などについては、各学級の担当教官が使用教科書に即して決めることとした。

- (1) 年間40時間を次の区分で各学期に配当する。

第1学期 16時間（4月を第6学年用の教科書へはいるまでの準備の期間として、このうち4時間をあてる。）

第2学期 16時間

第3学期 8時間（おそくとも、2月20日までに40時間の指導が終るようにする。）

以上を基準とするが、各学校の実情に応じて、各学期の時間を2時間以内の範囲内で適当に増減することができる。ただし1か年を通じて合計40時間は増減することはできない。

- (2) 週間・年間の指導回数，毎回の指導時間（分数）等については，各学級の担当教官がこれまでの経験に基き，最も効果が上がり，しかも実施しやすいと信ずるところにより，昭和28年度使用予定の教科書について，その内容や指導の目的に即して決定する。

19 報 告

国語審議会：ローマ字調査分科審議会； つづり方部会報告

（ローマ字調査分科審議会，つづり方部）
（会から第13回国語審議会総会への報告）（昭和27.3.10）

昭和25年4月，ローマ字調査審議会が国語審議会に統合され，ローマ字調査分科審議会として発足し，つづり方部会が設置され，昭和26年6月26日に，その第1回部会を開いて以来，昭和27年2月25日に至るまでに，24回の会合を重ねてまいりました。

第1回の部会におきまして，「なるべくすみやかに，少なくとも教育面においては，ローマ字のつづり方を一つの方式にまとめ，ローマ字教育を強力に推進しよう。」という意見が満場一致で承認され，以後，その線にそって慎重に審議を進めてまいりました。

初期におきましては，「3式の主張ないし理論的根拠などについては，もとの臨時ローマ字調査会ならびに，さきのローマ字調査審議会において，ほぼ出尽した感がある。1日でも早く，具体的に結論を出すためには，この部会では理論の討議はやめて，まだ，効力をもっているいわゆる訓令式を採り上げ，これに検討を加え，欠点があったならば，それを改めていくようにしたらどうか。」という提

案もありましたが、結局、「3式について、各人が思っところを、じゅうぶんに述べ合って、総合的な結論に到達すべきである。」との提案が採択されまして、それぞれの式についての主張・説明が行われました。それらの演述に対して、質疑応答がたびたび行われました。しかしながら、一方において、1日も早く結論を見いだすために理論の論議は切り上げて、具体的審議を行うべきであるとの意見が次第に高まり、第16回部会(26. 9. 10)におきまして、(1) 3式の主張については文書によつて行う。(2) 次回からは、サ行のつづり方から具体的審議にはいる、という2か条が確認されたのであります。

それ以後は一方において、印刷物による各式の理論上の主張・説明を行いつつ、部会の席上においては、毎回具体的に審議が進められ、第1読会としては、(6)を除いて、各項とも少数意見の留保つきで、次のように決定いたしました。

- (1) 「シ」は si または, shi と書く。
- (2) 「チ」は ti または, chi と書く。
- (3) 「ツ」は tu と書く。
- (4) 「フ」は hu と書く。
- (5) 「ジ」は zi または, ji と書く。
- (6) 「ダ行」は da(ダ) di(ヂ_デ) du(ヅ_ド) de(デ) do(ド) と書く。
- (7) 助詞の「ヲ」は wo と書く。
- (8) はねる音「ン」は n と書く。
- (9) つまる音はすべての場合に、つまる音を示す子音の部分を重ねて書く。

—ss—, または, —shsh—; —tt—, または, —chch—

- (10) 「シャ」は sya または, sha と書く。

残りの「シュ, ショ; チャ, チュ, チョ; ジャ(ヂャ), ジュ

(ヂュ), ジョ (ヂョ); クッ, グッ」などについても上記の方針による。

なお、名詞の初めを、大文字で書くことについては、多数の意見が一致し、これの決定は、分ち書き部会にゆだねることとなりました。

以上、第1読会として決定した諸事項、ならびに、決定事項中における「または」の解釈等につきましては、第2読会におきまして、さらに検討を加え、審議を続行する予定であります。

以上のとおり御報告いたします。

20 報 告

国語審議会：ローマ字調査分科審議会；

分ち書き部会報告

(ローマ字調査分科審議会：分ち書き部)
(会から第23回国語審議会総会への報告) (昭和27.3.10)

まえがき：国語審議会；ローマ字調査分科審議会に、分ち書き部会が設置され、昭和25年7月10日、第1回の会合を開いて以来、1年6か月、その間、16回の会議と、2回の連絡会とを重ねてローマ字文の分ち書きのしかたについて、慎重に審議しました結果、別冊のとおり「ローマ字文の分ち書きのしかた」をとりまとめましたので報告いたします。

審議の経過と方法：初めの2回は問題の所在と審議の方法とについて話し合い、その結果、現行のローマ字の教育面と実用面との両方から考えていくこととした。すなわち、たとえば、古典の書換え

のような特殊の場合のことは考慮の外にいたのである。

資料としては、文部省から発表された、「ローマ文字文の書き方」を主として、「^{改訂}ローマ字教育の指針 解説」を参考として用いた。そのさい、関係諸著書・文献、および、事務当局から提出した審議資料補遺などを合わせ用いた。

ローマ字文の分ち書きのしかた

- 1 単語は原則として一続きに書き、他の単語から離して書く。

Suzusii kaze ga soyosoyo huku.

Kyô wa watasi no tanzyôbi desu.

Nanka hosii, nâ ! Nante namae na no ?

- 2 a 接頭語は続けて書く。

osiroi, omiotuke, omaturi, ohitotu, oikura,

onsugata, onzôsi, ontamazusa,

mitamaya, mikuni, miakasi,

gokibô, gobuzi, gozonzi, muisiki, muzikaku,

husansei, huansin, bukiyô, bukiryô, buaisô,

hikagakuteki, higenzitudeki,

mamukai, massyôziki, massakasama, mappiruma,

manmaru, manmukai, mannaka, mayonaka

- b 接頭語のように用いられることばも続けて書く。

kutiosii, tunnomeru, utihorobosu, utiawase,

tatiokureru, tatigie, torimidasu, torikomi,

sasimodosu, sasisawari, kakikumoru, kakikudoki,

uraganasii, urawakai, itihayaku, osihakaru,

tehidoi, teitai, teatuku, teippai, subayai, zubutoi,

doerai, hunzibaru, bunnaguru, opporidasu, oppirogeru,

ottorikakomu, suttonkyô, kusodokyô, kusootituki,
raigakunen, mainitiyôbi, maizikan,
menami, onami, mematu, omatu, megitune, ogitune,
zenkoku, zenken, zensekai, syôkoku

3 a 接尾語は原則として続けて書く。

watakusitati, kotoritati, kimira, watasidomo,
okusamagata, okamisanren, hahago, yomego,
titiue, hahae, anigimi, senokimi, omawarisan,
oniisan, nêsan, ziisan, kamisama, hotokesama,
tyûidono, sontyôdono, tonobara, wakaisyu,
segareme, koitune, bakame, murabito,
takami, hukami, atusa, yowasa, akkenasa, okasimi,
atumi, sakate, okute, sekennami, nokinami,
hikakuteki, ronriteki, abunage,
midorinasu (kurokami), kodomorasii

b 接尾語のように用いられることばも続けて書く。

imadoki, higuredoki, hi no kuredoki, gohandoki,
tasogaredoki, kawataredoki,
imagoro, konogoro, hirugoro, rainengoro, 1980-nengoro,
nunogosi, kamigosi, tukuegosi, yamagosi,
itininmae (no sigoto), hutatukime, yonensei,
hatukakan, yôkaburi,
hidarikado, mukôgawa, kitagawa, higasiyori, hidarisumi,
migisita, hidariue, minamimuki, hantaimuki,
mukôgisi, gakegiwa, gakepputi, yotutuzi, gakesita,
sakaue, hidarimae, matinaka, suzimukô,
kamiwaza, ningenwaza, sekaizyû, matizyû,
hiyaasemono, bikubikumono, matatabimono,
sinnainagasi, tyôsihazure, komozutumi, kisizutai,

tunawatari, onsenmeguri, omiyamairi, kokorozumori,
hukurotozi, rôsokutate, kippukiri, zityensyanori,
saramawasi, zeikomi, tabakonomi, senpômoti,
tonboturi, monowazuke, asagaozukuri,
takuanzuke, sitattarazu, momizigari,
nezumitori, hadamamori, mangokudôsi,
senmaidôsi, hitomebore, mizusirazu, semitori,
dôbutuzukusi, kekkôzukumé, hunanorirenyû

ただし、「.....入り」,「.....売り」,「.....集め」,「.....選
び」,「.....落し」などのように、最初が母音で始まる語が続
くために、読みにくさを感じするような場合はつなぎ「-」を入
れてもよい。

mirukuiri (miruku-iri), nezumiirazu (nezumi-irazu),
kippuuri (kippu-uri), utautai (uta-utai), kâdoatume
(kâdo-atume) atusaatari (atusa-atari),
yomeerabi (yome-erabi),
darumaotosi (daruma-otosi), daikon'orosi (daikon-orosi)

また「ペン屋さん」,「めがね屋さん」などの「さん」は前
の語から離し、小文字で書き始める。

pan'ya san, meganeya san, tabakoya san

c 固有名詞に続く接尾語は離して書く。

Tarô tati, Yukiko ra, Zirô San tati, Andô Kun ra

d 固有名詞に続く、「さん」,「くん」,「様」,「氏」,「殿」な
どの敬称は離して、大文字で書き始める。

Hanako San, Gorô Kun, Tanaka-Yosio Sama,
Ôtuka Si, Noguti-Hideyo Dono

ただし、愛称・略称の「ちゃん」は続けて書く。

Kentyan, Settyan,
Makototyan, Hanakotyan,

また、固有名詞につく, 「先生」,「教授」,「博士」,「夫

人」,「委員」などは離して小文字で書き始める。

Watanabe sensei, Taguti kyôzyu,

Yukawa hakusi, Yamamoto huzin, Itô iin

- c 接尾語のうち,「だらけ」,「ぐらい」は離して書く。

doro darake, asedarake, ti darake, ke darake,

kono gurai, awatubu gurai,

Boku no sei gurai aru.

- 4 a 助動詞は原則として続けて書く。

kikaseru, miseru, yorokobareru, tasukerareru,

kakanai, tabeyô, ikitai, hanasimasu, okita,

moratta, yonda, mimai, ikumai,

arisô da, suzusionô da (様子・ありさまなどの意味を表わす「そうだ」。)

- b 助動詞のうちで,「だ」,「です」,「らしい」,「ようだ」,および,伝え聞く意味を表わす「そうだ」は離して書く。

Are wa Huzisan da.

Huzisan wa utukusii yama desu.

Mô minna kaetta yô da.

Kon'ya wa ame ga huru rasii.

Kono hon wa Yamada Kun no rasii.

Asoko wa taihen atui sô da.

〔注意1〕 接尾語の「らしい」は続けて書く。

Ano otoko wa itu made tottemo kodomorasii, ne.

〔注意2〕 「だ」を含めて形容動詞と認められる場合は「だ」を離して書く。

kirei da, zyôzu da

- c 助動詞「う」は接続する動詞・助動詞などによって,それぞれの行のオ段長音となる。

kakô, sasô, utô, utaô, yomô, urô, yobô,

desyô, masyô

- 5 a 助詞は離して書くのを原則とする。

Kore wa watakusi no hon desu.

Koko wa, natsu wa suzushii si, huyu wa atatakai.

Kare wa natsu demo huyu demo zyôbu da.

Tenki ga kuzureru na to omowaseru no go kono kumo da.

- b 助詞「は」, 「も」が, 助詞「に」, 「で」に重なった場合には続けて書く。

Ue niwa ue ga aru.

Dare nimo dekinai.

Tegami dewa osoku naru.

Kiku dake demo yoi.

- c 接続の「と」は続けて書く。

Haru ni naruto, tubame ga kuru.

- d 禁止の「な」は続けて書く。

Ikuna, yo. Sonna koto o suruna.

- e 用言につく助詞のうちで「ば」, 「ても(でも)」, 「て(で)」
「ながら」, 「たり(だり)」などは続けて書く。

Yomeba wakarui. Mitemo wakarumai.

Kusuri o nondemo naoranakatta.

Dôzo mite kudasai. Ugokanaide kudasai.

Nakinagara utatta.

Kodomotati ga detari haittari site asonde iru.

Tondari hanetari suru.

- f 「に」をともなって副詞句となる場合は続けて書く。

imani, wariaini, tokubetuni, sizenni, gûzenni, issyoni,

syôzikipini, yokeini, ...arigeni, migotoni, yutakani,

zyûbunni, seikakuni, sizukani, suguni, yôsuruni,

anzuruni, ippenni, itidoni, sasugani, imadani, zissaini,
tagaini, tuideni, tomoni wariaini, tugitugini
Asa no zyugyô ga hazimaru maeni, minna de hanasiai
no kai o hirakimasita.

- 6 複合語は続けて書くもの, つなぎ [-] を入れて書くもの, および, 離して書くものがある。

atikoti, minomawari, omoidasu, deau, kizuku,
sinrin-titai, wakari-yasui, hanasi-tuzukeru,
bunka kokka, yobô tyûsya, usukimi warui,
ansin suru, sippai suru, bikkuri suru, otomo suru

- a 1 語として, じゅうぶんに熟したもの, および連濁の現象を生じているものは原則として続けて書く。

ziyûzizai, asagohan, akurutosi, nomimizu, tenohira,
sôgokankei, zidôsôti,
tokorodokoro, tyûsyabari, mukôgisi, mezamasidokei,
toritukeru, sumituku, nesoberu, kokoroyoi,
tyûibukai, tika razuyoi

- b 複合語を構成する成分語の独立性がそれぞれ強いもの, および, 成分語の一つ, あるいは全部が独立性が弱く, 単独では独立語として普通に用いられにくいものは, つなぎ「 - 」を入れる。

- i 成分語の独立性が強いもの

ane-imôto, garasu-mado, haori-hakama, huro-oke,
hanasi-tuzukeru, tumi-tameru, omoi-kiru

- ii 成分語の独立性が弱いもの

tôsa-kyûsû, ziki-kandankei, anzen-titai,
zyetto-enzin, *abc*-zyun, taibutu-renzu,
ne-korobu, oi-sigeru, sosori-tatu

- iii 成分語がそれぞれ独立性が強く, しかも, 複合語として誤解されるおそれのないものは離して書く。

rikugun byôin, zidô kyôiku, gaikoku kôro,
ziyû bôeki, tyûsin sisô, genši bakudan,
mikata suru, kandô suru, suketti suru,
genki yoku, imi hukai, kagiri naku

7 複合固有名詞は、次のように書く。

- a 国・都・府・県・市・区・町・村などをとものった固有名詞
はつなぎ [-] を入れ書く。

Nippon-koku, Tôkyô-to, Ôsaka-hu, Nara-ken,
Kyôto-si, Tiyoda-ku, Hanamaki-mati,
Sibutami-mura

〔注意 1〕ただし、「町」, 「村」をとものわないでは地名と
して用いられないようなものは、続けて書く。

Yûrakutyô, Motomura

- b 固有名詞と普通名詞とが複合してできた一つの固有名詞(役
所・銀行・会社・団体・場所・施設・建物などの名まえ)は、そ
れが、他に同類がなく、ただ一つのものである場合には、普通
名詞も語頭を大文字で書く。

Nippon Ginkô, Tôkyô Daigaku, Yokohama Eki,
Syôin Zinzya, Naruto Kaikyô, Tôkyô Keibazyô,
Kusatu Onsen, Ueno Dôbutuen, Syônan Densya,
Koisikawa Syokubutuen, Tôyoko Basu,
Tanna Tonneru, Ôsaka Syôsen, Matusima Kaigan,
Sagami Tetudô, Syakuzii Kôen, Tôkyô Hoteru,
Izumo Taisya, Kamo Ôhasi, Nakano Pûru,
Zingû Kyôgizyô, Otiai Kasôzyô, Tôkyô Kyûkô Dentetu,
Hamanako Kankô Kisen, Tôkyô Wan,
Nippon Rain Onsen Hoteru

〔注意〕ただし、分けがたいもの、および連濁現象の現れたも
のは続けて書く。

Hanzômon, Katabiranotuzi, Ziyûgaoka,
Miyakezaka, Isiyamadera, Edogawabasi,
Sarusawanoike, Sumidagawa, Sakurazima

- c 商品名などで、他に同類があるものは、普通名詞を小文字で書く。

Isezaki meisan, Narumi sibori, Asahi biiru,
Yanagiya pomâdo, Kôsyû budô, Aomori ringo,
Pâkâ mannenhitu, Mitubisi enogu, Singâ misin,
Koronbia razio, Korona taipuraitâ

- 8 複合固有名詞を構成する成分語が、いずれも固有名詞である場合にはつなぎ [-] を入れて書く。

- i 日本人の姓名。

Yukawa-Hideki, Miyake-Yasuko

- ii 同一の地名などを区別する場合。

Izu-Nagaoka, Atami-Ginza, Nagato-Hutami,
Kanda-Surugadai, Nezu-Yaegakityô

- iii 二つの地域を合併して一つの呼び名で呼ぶ場合。

Uzi-Yamada

- iv 会社名などを冠した駅名など。

Keihin-Kawasaki (京浜川崎), Tôbu-Nikkô (東武日光),
Naraden-Kyôto (奈良電京都), Seitetsu-Hakata (西鉄博多)
Keiô-Tamagawa (京王多摩川), Dentetsu-Takasago (電鉄高砂)

- 9 「上」, 「下」, 「東」, 「北」, 「新」などの接頭語のついた固有名詞は、接頭語の部分も大文字で書き始め、つなぎ [-] を入れて書く。

Kita-Sasebo, Higasi-Nakano, Sin-Nagoya,
Hon-Tiba, Simo-Itabasi, Kami-Ôsaki, Tyûô-Maebasi

- 10 「前」, 「裏」, 「わき」などの接尾語を伴う固有名詞は、接

尾語の部分の小文字で書き、その前につなぎ〔-〕を入れる。
Tamagawaen-mae, Kudan-sita, Gizidô-waki,
Gakkô-ura, Hakusan-ue, Zingû-mae-nisiguti

21 報 告

国語教育におけるローマ字の取扱について

(国語審議会：ローマ字教育部会か)
(ら第14回国語審議会総会への報告) (昭和27.4.14)

国語教育におけるローマ字の取扱について審議しました結果、次のとおり決定いたしましたので報告いたします。

- 1 小学校の国語科の中で、漢字・かなのほかにローマ字による国語の読み書きを必修とすること。なお、これはさしあたり第3学年以上の児童に授けるのを適当とする。
- 2 つづり方、および、分ち書きの方式は教育の課程においては、単一なものであるべきである。
- 3 大学の一般課程においては、ローマ字についての知識を、教員養成の課程においては、さらに、ローマ字の学習指導法を授けるよう処置すること。なお、現在、ローマ字の学習指導を担当している教員の再教育についても、適当な方法を講ずること。
- 4 国語科以外の教科においても、その教科書の中に、ローマ字を用いたものの検定を行うこと。
- 5 中学校におけるローマ字の学習は、当分の間、現行の取扱によって実施するものとする。なお、高等学校以上においても、ローマ字を使う機会を与えることが望ましい。

提 案 理 由

1 審議の目的：1950年に来訪した第2次訪日アメリカ教育使節団報告書中の「国語の改革」の章の最後にしるされた4項の勧告のうち、第1、第2および第3の勧告に対し、国語審議会として、とるべき対策を審議すること。（別紙：1，2参照）

2 ローマ字学習の必要：国語の表記をやさしくして、教育や知識を広め、文化的国民を育て上げる一つとして、漢字・かなと並行してローマ字の学習を行うことが必要である。

また、ローマ字は今日、世界で広く行われている文字であり、日本でも国語を書き表わすために用いられることが多くなってきたので、ローマ字による国語の書き表わし方、および、読み方を学ぶのである。

3a ローマ字による国語の読み書きを必修にする理由：

(1) ローマ字を学習することによって、国語教育の効果をいっそう高めることができる。

(2) 現在、社会でローマ字が使われており、将来ますます普及する可能性があるから、児童にローマ字の学習をさせる必要がある。しかし、現行のように、各学校の選択にまかせておいたのでは、ローマ字教育の効果をじゅうぶんに上げることができないから、これを必修とすべきである。

b さしあたり、第3学年からローマ字の学習を始める理由：

(1) ローマ字の学習も、文字教育の原則からいえば、第1学年から始めるべきであるが、国語教育の学習段階からいっても、教員の質と数とから考えても、さしあたり、第3学年から始めるのが比較的行われやすく、また、効果が上がると考えられる。

現行制度に従い、すでに第3学年から行っている学校もあるから、この学年からならば、実施することができると思われる。

(2) 従来の経験から考えて、ひととおり、ローマ字文をすらすら

と読み書きする能力を養うためには、第3学年から始め、各学年とも最低限度、年間40時間は必要と思われる。

c つづり方・分ち書きの方式が単一なものであるべき理由：

正規の教育課程として全国的にローマ字の学習を行うためには、単一なものでなければ、いろいろの不便を生ずるおそれがある。

d 教員の再教育についての具体的処置：

文部省・教育委員会，または，それから委託された民間団体などが必要な講習を行う。

e 中学校におけるローマ字学習の取扱を当分の間、現行のままとする理由：

中学校におけるローマ字学習の必修の問題は、小学校において、第3学年から必修科目としてのローマ字を授けられた児童が、中学校へ入学する年度からは考慮すべきであるが、それまでは生徒の学力水準がまちまちであり、また、教員の質と数とからみて、一応、現行の取扱によるのが適当であろうと思われる。

4 少数意見：別紙のとおり、審議，決定したが、これに対する少数意見は下記のとおりである。

a 1について：

(1) 小学校の正規の教育課程の中へローマ字を入れる必要はない。

(2) 授業開始の学年は、現行のとおり、第4学年あるいはそれ以後とすること。

b 2について：「2」のあとへ、「ただし、単一な方式の決定を見るまでは、従来のとおり3式を認めることとする。」をつけ加えること。

c 提案理由 2について：前半，すなわち，「国語の表記をやさしくして……必要である。」をはぶき，後半だけとすること。

第8回国語審議会総会要録 抄

(要録11ページ～12ページ)

会長：国語審議会として、使節団の勧告内容を審議事項として採り上げるか、どうか。(採り上げることに決定。)では、この勧告に基いて、問題を検討するために部会を作るか、どうか。

千葉：報告書の Language Reform の章の4項中、第3に「大学程度の水準において」とあるが、大学でローマ字の研究をするか、どうかをはっきりさせてもらいたい。また、部会は4項目全部の対策委員会か。

会長：「大学程度の水準」というのは、必ずしも大学だけではないが、大学も含まれると思う。厳格には、部会ができてから決められるべき問題であろう。部会はローマ字教育を一般的な立場で採り上げる。第4項は別だ。第1項から第3項までは、今まで国語審議会では採り上げられなかったことである。これについての部会は、ローマ字調査分科審議会の部会とせず、まず、国語審議会の部会として設置して、次に具体的な事項を採り上げる段階となって、部会をローマ字調査分科審議会の中にもっていくことになる。(異議なし。)

ローマ字教育部会の委員は何人ぐらいがよいか。

石黒：会長に考えてもらうのがよい。

会長：12人ぐらいではどうか。(賛成。)では、指名させていただく。

大塚，千葉，松浦，安藤，石黒，長沼，

佐野，武藤，山崎，時枝，牛山，照井

以上のかたがたに御異議がなければ、お願いしたい。(異議なし。)

別紙 2

第2次訪日アメリカ教育使節団報告書（ぬきがき）

国語の改革

（前文省略）

国語改革については、次のような勧告をする。

- 1 一つのローマ字方式が最もたやすく一般に用いられうる手段を研究すること。
- 2 小学校の正規の教育課程の中に、ローマ字教育を加えること。
- 3 大学程度において、ローマ字研究を行い、それによって教師がローマ字に関する問題と方法とを教師養成の課程の一部として研究する機会を与えること。

22 建 議

昭和28年3月12日

文部大臣 岡野清豪殿

国語審議会会長

土 岐 善 麿

ローマ字つづり方の単一化について（建議）

ローマ字のつづり方については、昭和12年の内閣訓令第3号（いわゆる訓令式）によって、公式に単一化されているわけでありま
す。しかし、一般社会で現実に用いられているつづり方としては、
いわゆる標準式（ヘボン式）・日本式・訓令式の3種があり、昭和
22年から実施された義務教育におけるローマ字の学習指導でも、こ

の3式の中から自由に採択することができるような処置がとられました。

ローマ字のつづり方については、ローマ字の学習指導実施についての対策を協議するため、昭和21年に設けられたローマ字教育協議会では、「ローマ字教育を行ふについての意見」をまとめ、その中で、「……ローマ字の表記法(特につづり方)については、……さらに適當の機関を設け、学術上・教育上および實際生活上から研究を進め改善をはかられたときこと。」と述べてあり、教育の現場からはつづり方の単一化が強く要望されております。

国語審議会は、国語を書き表わすローマ字のつづり方の単一化をはかることが重要な事からであることを認め、昭和23年10月に設置された「ローマ字調査会」以来の審議事項を引きつぎ、通計54回に及ぶ会議で慎重な審議を重ねた結果、昭和28年3月12日第18回総会において別紙のとおり「ローマ字のつづり方」を決定しました。

第1表・第2表の具体的な取扱についてはさらに必要な機関と連絡して御決定のうえ、ローマ字の単一なつづり方が政府部内および義務教育はもちろん、ひろく一般社会に用いられるよう必要な処置をとられることを要望します。

ま え が き

国語のローマ字つづり方として広く行われている方式には、それぞれに根拠、特色および歴史があり、いずれのつづり方にもわかにその使用を無視することはできない。

しかしながら、国語教育の上や公式の文書、地名などに用いられる場合には、おのずから一定のよりどころがなければならない。この「ローマ字のつづり方」の第1表は、すなわちそのよりどころの役をなすものである。

ただし、第2表によるつづり方も現実には通用しているものであるから、その読み方もまた教育の適當な時期において習得されなけ

ればならない。

なお、そえがきは、書き表わし方のうちのおもなきまりをあげたものである。

ローマ字のつづり方

国語のローマ字つづり方は第1表による。

ただし、第2表のつづりを用いてもよい。

第 1 表

〔 () は重出を示す 〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo

di	du	dya	dyu	dyo
kwa				
gwa				
				wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

23 答 申

昭和28年8月4日

文 部 大 臣 あて

教育課程審議会会長

小中学校のローマ字学習に関する答申

本審議会は、文部大臣の諮問事項「小中学校のローマ字学習について」につき、研究討議しました結果、小中学校の教育課程におい

て、国語審議会会長の建議（昭和28年3月12日づけ「ローマ字つづり方の単一化について」）通りに、実施してもよいことに決定いたしました。ただし当局は具体案の作成にあたっては、実施上混乱をきたさないような処置をとられるように要望します。

（補注： 建議「ローマ字のつづり方の単一化について」は、
47 ページを参照。）

24 新聞発表

（昭和28年8月4日）

このたび、教育課程審議会から、小・中学校におけるローマ字教育を、さきに国語審議会が可決し、文部大臣あて建議した「ローマ字つづり方の単一化について」の趣旨どおり実施してさしつかえないむねの答申がありました。

所定の手続を経て、これが実施されれば、学習指導ならびに教科書についての具体的処置は、次のような趣旨によって取り扱われることになると思います。

1 学習指導について

- (a) ローマ字のつづり方は、現在一般社会においては、いろいろの方式のものが用いられているが、ローマ字の学習指導においては、昭和28年3月12日、国語審議会決定のつづり方のうち、第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）を、そのよりどころとする。

〔参考： 現在行われているローマ字教育は、つづり方については、いわゆる訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち、どれによってもさしつかえないことになっているので、

現行の「小学校および中学校・高等学校学習指導要領（国語科編）」には、よりどころとすべきつづり方については、特に明示されていない。]

- (b) 第2表に掲げるつづり方（そえがきを含む。）によるローマ字をも読むことができる。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領（国語科編）」には、
「ほかの式のつづり方のローマ字文をも読むことができる。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方（そえがきを含む。）によるローマ字文を読めるようにするには、まず第1表に掲げるつづり方によるローマ字文にじゅうぶんに慣れてから始めるようにする。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領（国語科編）」には、
「ほかの式のつづり方のローマ字文を読めるようにするには、まず、一つの式にじゅうぶん慣れてから始めるようにすべきである。」とある。〕

2 教科書について

- (1) 国語科ローマ字の教科書について

- (a) つづり方の第1表・第2表（昭和28年3月12日国語審議会決定）を示す。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「つづり方の比較表が適切に用意されているか。」とある。〕

- (b) ローマ字のつづり方は、昭和28年3月12日、国語審議会決定のつづり方のうち、第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）をそのよりどころとする。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「ローマ字つづりは、いわゆる訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち、どれかを主として用いてあるか。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方のローマ字文の読み方も、適当な時期において、習得することができるよう配慮する。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「どの式を採用するにしても、他の二式についての知識をも与えるよう配慮されているか。」とある。〕

(2) 国語科ローマ字以外の教科書について

ローマ字のつづり方は特別の必要のない限り，昭和28年3月12日，国語審議会決定のつづり方の第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）を一貫して用いる。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「ローマ字つづりは，特別の必要のない限り，訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち，どれか一つを一貫して用いる。」とある。〕

なお，「小学校および中学校・高等学校学習指導要領（国語科編）」および，「教科用図書検定基準」の改訂等については，正式に決定し次第発表されることと思います。

25 通 達

（文初初第 568 号）
（昭和28年8月31日）

各都道府県教育委員会 }
各都道府県知事 } あて
各教員養成大学(部)長 }

文部省初等中等教育局長
文 部 省 調 査 局 長

小中学校のローマ字学習について（通達）

これまで小中学校のローマ字学習におけるつづり方に関しては，

いわゆる訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち、そのどれかにより、どの式によるにしても、他の二式についての知識をあわせて得るようになっておりましたが、このたびその単一化をはかり、別記の第1表（そえがきを含む。）をそのよりどころとし、第2表（そえがきを含む。）についての知識もあわせて学習させることにしました。その指導実施の時期方法等については別記をじゅうぶにご参照の上、学習上混乱をおこさないようにご配慮ください。なお参考資料として国語審議会の建議を添付いたします。ついては、この件に関し貴管下各市町村教育委員会（小中学校付属小中学校）へ周知方をお願いします。

別 記

1) ローマ字のつづり方

第1表, 第2表, そえがき

2) 実施の時期

(イ) 学習指導について。 (ロ) 教科書について。

3) 昭和28年度、昭和29年度における取扱。

4) 学習上混乱をおこさないための注意。

1) ローマ字のつづり方

国語のローマ字つづり方は第1表による。

ただし、第2表のつづりを用いてもよい。

第 1 表

〔（ ）〕は重出を示す。〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	kō	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo

ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dya
kwa			
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお、固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

2) 実施の時期

(イ) 学習指導について

昭和30年度から下記の趣旨によって実施されることとなる。(ただし学習指導の目標、方法などについては何らの変更もない。)

- (a) ローマ字のつづり方は現在一般社会においては、いろいろの方式のものが用いられているが、ローマ字の学習指導においては、第1表に掲げるもの(そえがきを含む。)を、そのよりどころとする。

〔参考：現在行われているローマ字教育は、つづり方については、いわゆる訓令式・日本式・標準式(ヘボン式)のうち、どれによってもさしつかえないことになっているので、現行の「小学校および中学校・高等学校学習指導要領(国語科編)」には、よりどころとすべきつづり方については、特に明示されていない。〕

- (b) 第2表に掲げるつづり方(そえがきを含む。)によるローマ字文をも読むことができるようにする。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領(国語科編)」には、「ほかの式のつづり方のローマ字文をも読むことができる。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方(そえがきを含む。)によるローマ字文を読めるようにするには、まず第1表に掲げるつづり方によるローマ字文にじゅうぶんに慣れてから始めるようにする。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領(国語科編)」には、「ほかの式のつづり方のローマ字文を読めるようにするには、まず、一つの式にじゅうぶん慣れてから始めるようにすべきである。」とある。〕

(ロ) 教科書について

昭和30年度においては、前記通達の趣旨にもとづいた教科書が検定発行される予定である。

3) 昭和28年度，昭和29年度における取扱

昭和28年度の残りの期間および昭和29年度においては，これまでどおり実施することを原則とする。

4) 学習上，混乱をおこさないための注意

ローマ字による国語の書き表わし方と現代かなづかいによる国語の書き表わし方とは，それぞれ独自の体系に基いて決められているもので，両者の間で一致していない点は，連濁・連呼の場合の書き表わし方ばかりでなく，助詞・長音・よう音・つまる音の書き表わし方などにも見られるから，その点をはっきりさせ，それぞれの体系において指導すべきである。

参考資料

昭和28年3月12日

文部大臣 岡野清豪殿

国語審議会会長
土岐善麿

ローマ字つづり方の単一化について
(建議)

ローマ字のつづり方については，昭和12年の内閣訓令第3号(いわゆる訓令式)によって，公式に単一化されているわけであります。しかし，一般社会で現実に用いられているつづり方としては，いわゆる標準式(ヘボン式)・日本式・訓令式の3種があり，昭和22年から実施された義務教育におけるローマ字の学習指導でも，この3式の中から自由に採択することができるような処置がとられました。

ローマ字のつづり方については，ローマ字の学習指導実施についての対策を協議するため，昭和21年に設けられたローマ字教育協議会では，「ローマ字教育を行ふについての意見」をまとめ，その中で，「……ローマ字の表記法(特につづり方)については，……さらに適當の機関を設け，学術上・教育上および實際生活上から研究を進め改善をはかられたきこと。」と述べてあり，教育の現場からはつづり方の単一化が強く要望されております。

国語審議会は，国語を書き表わすローマ字のつづり方の単一化をはかることが重要な事であることを認め，昭和23年10月に設置された「ローマ字調査」会以来の審議事項を引きつぎ，通計54回に及ぶ会議で慎重な審議を重

ねた結果、昭和28年3月12日第18回総会において別紙のとおり「ローマ字のつづり方」を決定しました。

第1表・第2表の具体的な取扱についてはさらに必要な機関と連絡して御決定のうえ、ローマ字の単一なつづり方が政府部内および義務教育はもちろん、ひろく一般社会に用いられるよう必要な処置をとられることを要望します。

「ローマ字のつづり方」

ま え が き

国語のローマ字つづり方として広く行われている方式には、それぞれに根拠、特色および歴史があり、いずれのつづり方にもわかにその使用を無視することはできない。

しかしながら、国語教育の上や公式の文書、地名などに用いられる場合には、おのずから一定のよりどころがなければならない。この「ローマ字のつづり方」の第1表は、すなわちそのよりどころの役をなすものである。

ただし、第2表によるつづり方も現実には通用しているのであるから、その読み方もまた教育の適当な時期において習得されなければならない。

なお、そえがきは、書き表わし方のうちのおもなきまりをあげたものである。

（「ローマ字のつづり方」の表は、別記(1)のとおりであるから略す。）

26 報 告

ローマ字教育について

（ローマ字調査分科審議会：教育部会）
（から第20回国語審議会総会への報告）（昭和29.3.15）

ローマ字は単音文字であり、また、ローマ字書きは必然的にわかち書きを伴うから、日本語をローマ字で書き表わしてみると、その正しい発音、文における単語の役割のきまり、単語の並べ方のきま

りなどの事実がはっきりと現れてくる。

この意味で、ローマ字の学習は、国語を正しく効果的に使いこなすために、国語のしくみとはたらきとを児童にたやすく理解させる手段となるものであるから、その指導を国語教育の一環として、なるべく低学年から始めることについて、さらに審議すべきである。

27 報 告

ローマ字文のわかし書きについて

(ローマ字調査分科審議会：わかし書き部)
(会から第20回国語審議会総会への報告) (昭和29.3.15)

わかし書きは、日本語をローマ字で書き表わす際の正字法の一部であって、文法と密接な関係をもっていることはいうまでもないが、本来、実用的なものであるから、理論のみにとらわれず、国民一般に読みやすく書きやすいことを主とすべきである。

審議にあたっては、問題となるような具体例を多く集め、文法との関連を考慮しながら検討を加え、その後に大局的見地から再検討のうえ決めることが適当と思われる。

28 告 示

内閣告示第1号

(原文は「ローマ字のつづり方」以下を除いて縦書。)

国語を書き表わすに用いるローマ字のつづり方を次のように定める。

昭和 29 年 12 月 9 日

内閣総理大臣 吉 田 茂

ローマ字のつづり方

ま え が き

- 1 一般に国語を書き表わす場合は、第1表に掲げたつづり方によるものとする。
- 2 国際的關係その他従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によってもさしつかえない。
- 3 前二項のいずれの場合においても、おおむねそえがきを適用する。

第1表 〔（ ）は重出を示す。〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dyu
kwa			
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

29 訓 令

内閣訓令第1号

(原文は縦書)

各 官 庁

ローマ字のつづり方の実施について

国語を書き表わす場合に用いるローマ字のつづり方については、昭和12年9月21日内閣訓令第3号をもってその統一を図り、漸次これが実行を期したのであるが、その後再びいくつかの方式が並び行われるようになり、官庁等の事務処理、一般社会生活、また教育・學術のうえにおいて、多くの不便があった。これを統一し、単一化することは、事務能率を高め、教育の効果をあげ、學術の進歩を図るうえに資するところが少なくないと信ずる。

よって政府は、今回国語審議会の建議の趣旨を採択して、よりどころとすべきローマ字のつづり方を、本日、内閣告示第1号をもって告示した。今後、各官庁において、ローマ字で国語を書き表わす場合には、このつづり方によるとともに、広く各方面に、この使用を勧めて、その制定の趣旨が徹底するように努めることを希望する。

なお、昭和12年9月21日内閣訓令第3号は、廃止する。

昭和29年12月9日

内閣総理大臣 吉 田 茂

(補注：昭和12年9月21日内閣訓令第3号は、9ページ参照。)